

舞台は身体のドキュメンタリー

文 = 堤 広志 (舞台評論家)

勅使川原三郎のダンスを見て、いつも思い浮かべるのは「コミットメント」という言葉である。日産自動車のCEO カルロス・ゴーン氏が「公約」「誓約」を意味するこの言葉を用いて業績を回復させたことは有名だが、勅使川原のダンスの場合、「献身」「関わりあい」といった訳語の方がふさわしいかもしれない。

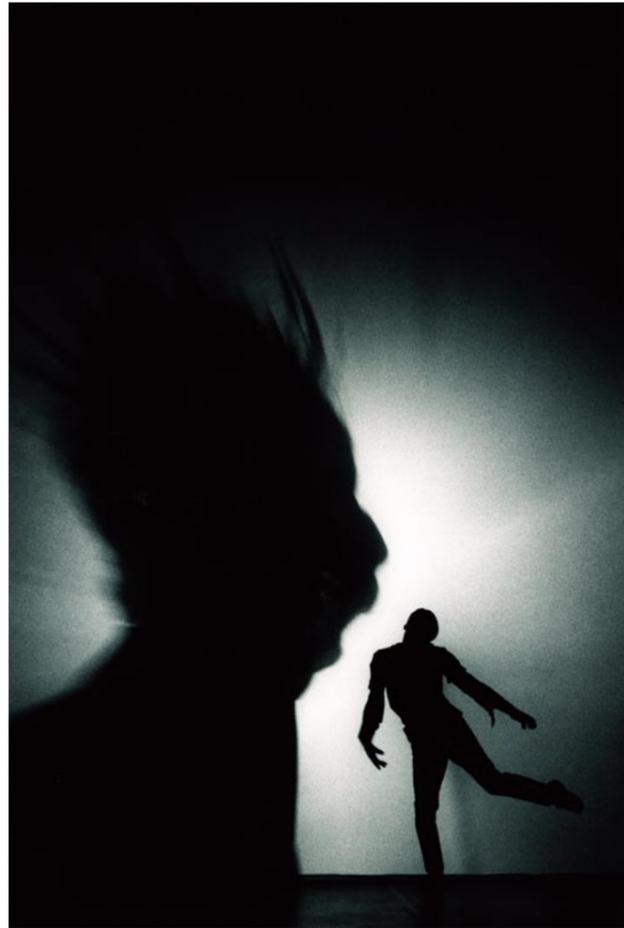
そもそも「コミットメント」(commitment)の語源は、「すべてを送る」「ゆだねる」という意味であり、古くは神に対して「魂をゆだねる」「(身を呈して)誓約する」という厳粛な要素があった。つまり、自発的に身を献じ、その場の状況に責任を負う、フィジカルな行為としてのニュアンスがある。これはそのまま、勅使川原の「ダンス」と同義と言っても良いのではないだろうか。

というのも、今や伝説となっている^{ひのえまた} 榎枝岐でのパフォーマンスが思い起こされるからだ。80年代初頭、勅使川原は福島県の山奥で土中に首まで埋まり、8時間耐え続けるというパフォーマンスを行ったことがある。夕立で地面が膨張し、筋肉は収縮して、掘り起こされても立つことができなかった。しかし、「血行が戻ってきて立ってみると体が空気によって支えられているような不思議な感じ」を覚えたという(『日本経済新聞』2001年3月19日夕刊・インタビュー:河野孝氏)。

この体験が勅使川原のダンスの原点となっている。以来、彼は身体を取り囲む空気や呼吸を意識したダンスを創作し続けているのだ。そして、あえて手強い環境に身を投じながら、その場の状況とアクチュアルに向い合い、常に皮膚感覚のように鋭敏な感性を働かせて、即興的に踊る。今も土の中から出た時のように。

『Here to Here』にはそんな勅使川原のスタンスが端的に表れている。舞台は真っ白い布の壁で三方と天井を囲まれた何もない空間。一切の装飾を排除したホワイトキューブに身を投じて、卓抜した集中力と持てる技量のすべてをさらけ出し、一度も退場することなく約55分間を一人で踊りきる。陰翳礼讃をイメージさせるような微妙な階調のライティング、布の壁を効果的に利用した驚愕の演出(これは観てのお楽しみ)には、個人の内面と外部の他者との関係を象徴するような深い精神性さえ感じられる。95年にドイツ・フランクフルトで初演され、その後ヨーロッパを中心に世界11カ国17都市で公演。日本では、97年銀座セゾン劇場(現ル テアトル銀座)の公演以来、待望の再演となる。

かつて勅使川原は、筆者のインタビューに応じてこうも語っていた。「僕は舞台で行われることは、ある種のドキュメンタリーみたいなものだと思うんですね。何かを再現するの



勅使川原三郎『Here to Here』。1995年フランクフルトで生まれたこの作品は、初演から2年で世界17都市を巡った名作。それから10年、再演の声を受け、昨秋イタリア、フランスで復活上演された『Here to Here』が、遂に彩の国さいたま芸術劇場に登場。真っ白な光の壁で、三方と天井を囲むインスタレーションの中、一瞬一瞬と身体で切り結ぶ勅使川原ならではの美学が際立つソロ・ダンス。



ではなく、そこで新たなものを生み出すのです」。

一瞬一瞬をその場その時と斬り結び、生成と消滅を繰り返しながら、更新を重ねていく。究極のソロダンスにあなたも是非コミットしてもらいたい。

公演評

“純粹で神秘的な、禅の墨絵の如く陶酔的な作品”

(1996年10月25日 Le Figaro 紙)

“無と静寂の場であると同時に凝縮されたその空間は、物事の隠れた質感を明らかにするのである。”

『Here to Here』は、ものに息吹を吹き込むような感覚によって構築された作品である”

(Frankfurter Allgemeine Zeitung 紙)

PROFILE

勅使川原 三郎

Saburo Teshigawara



©Bengt Wanselius

クラシックバレエを学んだ後、1981年より独自の創作活動を開始。1985年、宮田佳と共に KARAS を結成し、既存のダンスの枠組みではとらえられない新しい表現を追求。類まれな造形感覚を持って舞台美術、照明デザイン、衣装、音楽構成も自ら手がける。そのかつてない独創的な舞台作品は、ダンス界にとどまらず、あらゆるアートシーンに衝撃を与え、国際的に高い評価を得ている。自身のソロ作品、KARAS とのグループ作品の他にも、パリ・オペラ座バレエ団、フランクフルト・バレエ団、ネザーランド・ダンス・シアターなど、ヨーロッパの主要バレエ団からの依頼で作品を創作。世界的先駆者として、常に実験的でありながら完成度の高い作品を創り続けている。代表作に『石の花』『NOBJECT』『Here to Here』『Bones in Pages』『ガラスノ牙』等がある。『ガラスノ牙』で2006年度芸術選奨文部科学大臣賞。2007年、『Bones in Pages』でベッシー賞受賞。『ミロク』で2007年度舞踊批評家協会賞受賞。ダンス教育に関しても独自の理念をもち、国内外で若手ダンサーの育成に力を注ぐ。現・立教大学教授。

●●●● DANCE ●●●●

勅使川原三郎『Here to Here』

【日時】9月20日(土) 開演 16:00 21日(日) 開演 15:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『Here to Here』(1995年初演)

【振付・美術・照明・衣装】勅使川原三郎 【出演】勅使川原三郎 宮田佳 佐東利穂子

【チケット(税込)】一般:S 席5,000円/A 席3,500円/学生A 席2,000円

メンバーズ:S 席4,500円/A 席3,150円 【発売日】一般:6月7日(土) メンバーズ:5月31日(土)